

令和6年度 学校経営計画・学校評価シート					高知県立盲学校				
《高知県の教育の基本理念》	(1) 学ぶ意欲にあふれ、心豊かでたくましく夢に向かって羽ばたく人 (2) 郷土への愛着と誇りを持ち、高い志を掲げ、日本や高知の未来を切り拓く人 (3) 多様な個性や生き方を互いに認め、尊重し、協働し合う人		《目指すべき姿》	学校像	(1) 一人一人が確かな学力と専門技術を身に付け、社会参加と自立に向けて学ぶ意欲を持てる学校 (2) 一人一人の人権が尊重され、安心して学習・生活ができる環境が整った学校 (3) 地域のニーズに応える、視覚障害教育のセンター的機能を発揮する学校 (4) 教職員一人一人が教育公務員としての自覚と誇りを持ち、切磋琢磨、協働しチームとして教育に取り組む (5) 幼児児童生徒、保護者、地域、県民から信頼、必要とされる社会に開かれた学校	目指すべき取組姿の概要現に	《取組概要》 改訂された第3期教育等の振興に関する施策の大綱（以下、教育大綱）並びに第4期高知県教育振興基本計画（以下、教育基本計画）の内容を踏まえ、本校が課題とする事柄を精査し、学校教育目標の実現に向け、中期（3年間）、短期（当年度）の目標を定め取組を推進していく。また、教育大綱並びに教育基本計画とあわせて、文部科学省が学習指導要領に示す「生きる力」＝『知』『徳』『体』3つのバランスの取れた幼児児童生徒を育成する。		
	《取組の方向性》	《4つの基本方針》 Ⅰ「高知家」の全ての子どもたちが、急速に変化する予測困難な今後の社会を生き抜く力を身につけるための教育の推進 Ⅱ「高知家」の子ども誰も誰一人取り残さず、多様な背景・特性・事情等を踏まえた包摂的な教育・支援の推進 Ⅲ「高知家」の誰もが、生涯にわたって学ぶことができる環境づくりと活動・取組の推進 Ⅳ「高知家」の教育・学びに向けた各種施策を総合的・計画的に推進するために、必要な基礎的・基盤的な環境・体制等の整備		児童生徒像	【知】「自らまなぶ」 主体的、意欲的に学び続けることができる幼児児童生徒 【徳】「社会とつながる」 周りの仲間とのつながりを大切にし、社会参加できる幼児児童生徒 【体】「たくましくあゆむ」 自ら障害に向き合い、自己実現に向けて積極的に行動できる幼児児童生徒		《中期目標（3年間）》 ・生きる力の涵養（「知：確かな学力」「徳：豊かな人間性」「体：健康・体力」） ・在籍者数2桁台を確保する。 《令和6年度》 ◆学力の3要素を踏まえた、学習意欲を引き出す授業の実施 ◆視覚障害による学習面、生活面における困難さの克服、改善 ◆豊かな心・自律心・道徳心・の育成（自ら考え・判断し・行動できる、挨拶、協調性、思いやる心、感動する心、多様性、食など） ◆文化・芸術、スポーツ、防災関連等のコンクールや大会、会議等へのチャレンジ ◆盲学校の魅力発信（センター的機能の発揮）		

《重点取組項目》 (評価 A:目標を十分に達成 B:ほぼ目標を達成 C:やや不十分 D:改善を要する)

項目		取組のねらい【P】	現状と目標【評価指標】	具体的な取組内容【D】	中間評価【C】	中間評価後の取組内容【P・D】	年度末評価【C】	学校関係者評価		見直しのポイント【A】		
教育専門性の向上・充実	主体的・対話的で深い学びの実現	教科及び視覚障害教育の専門性を向上させるとともに、学習意欲を引き出す授業の実施と学習評価の充実をとおして主体的・対話的で深い学びによる生きる力を育成する。	《成果指標》 【教育課程・授業改善をテーマにした学部研、教科会の実施（年間6回以上）】 【改訂版専門性チェックリストによる確認】 【ICT教材教具発表会（年間1回以上）】	○公開授業の実施（任意） ○専門基礎研修グループを活用した授業研究 ○専門性チェックリストの実施と効果的な活用 ○中国・四国地区盲学校のネットワークを活用した授業の展開及び教科指導のスキルアップ ○専門性、学習評価に関する研修会の実施 ○ICTを活用した教材教具発表会の実施 ○教育課程の検討、見直し	C	○内進生の実態を踏まえ、進学予定の学部で教育課程・授業の手立てなどをテーマに検討会を行った。 ○改訂版専門性チェックリスト項目についてカリマネ委員会で検討、精査を行った。 ○夏季休業中に外部講師を招へいし、視覚障害教育の専門性や自立活動に関する校内研修会を実施した。 ○これまで取組んできた学習評価（ルーブリック評価）は、実践後の懐疑的な意見も根強く、評価の妥当性を理論づけているに過ぎないとも指摘されている。授業改善の指標として用いるには見直す必要がある。	○学習評価のあり方については研究部と校内カリマネ委員会を中心に早急に検討する。指導と評価の一体化については、3か年計画の研究テーマとなっているので、最終年度となる研究成果をまとめる視点で改善に取り組む。	C	○公開授業（任意）の実施率は約20%、参加率も約30%であった。 ○学部研、教科会を1回参加、実施した教職員は70%に達したが、目標である年間6回以上の参加・実施を達成した教職員は約20%程度だった。 ○改訂版専門性チャックリスト実施結果では、視覚障害教育や支援の専門性について一定の知識は獲得できているものの児童生徒への指導、教職員同士が学び合うOJTに必要な力量の習熟度は十分でない。 ○ICT教材教具発表会を行い、学習意欲を高める活用方法について情報が共有できた。	B	○教職員の全てが目標を達成できていないわけではなく、自らの専門性を向上させようと熱心に取り組んでいる教職員もあり、やる気につなげてもらいたいと考えるので、B評価でよいのではないかと。 ○児童生徒数が減少しても視覚障害教育のセンター的機能として維持・継続すべき専門性（例えば点字指導、歩行指導、弱視教育）について選択と集中を進めていきたい。	○授業力の向上や日々の授業の成果を検討するための公開授業や教科会について、負担感が根強くイメージ化されている。子どもたちに身につけさせたい力を議論する場として継続したいが、回数や実施方法については検討していきたい。
	キャリア教育の充実	心豊かな人間性の育成	人権教育、道徳教育の推進、文化芸術・スポーツ・健康に関する取組の充実により、生涯を通じて心豊かな生活を送ることができる力を育成する。	《成果指標》 【外部機関と連携した交流・共同学習（年間3回以上）】 【各学部、舎におけるSDGs・食育の実施（学期1回以上）】 【個別的教育支援計画に文芸スまたは防災への取り組み関する事項を記載（記載率100%）】 【児童生徒アンケートの実施（肯定的評価100%）】	○すがすがしい挨拶の励行 ○人権教育、道徳教育の推進 ○交流及び共同学習の充実 ○学部・専門委員会・生徒会と連携した食育の実施 ○学校安全（3領域）の推進 ○文化・芸術、スポーツ、防災関連等のコンクールや大会、会議等への積極的なチャレンジ OSC、SSWとの連携	C	○高知城歴史博物館、NHK、土佐和紙工芸作家、地元カヌークラブなどを外部講師とした交流・共同学習を行った。 ○学校栄養士を中心とした食育の取り組みに児童生徒も積極的に参画できた。 ○支援が必要な家庭についてSC、SSWと情報を共有することができた。 ○児童会とは対照的に生徒会活動が集団として一部機能できていない。構成メンバーには、成人生徒もあり、活動の大切さについて、価値観が共有できず、活動自体に消極的であった。	○生徒会活動については、担当教員も苦労しているので、学部の重点的な事項として位置づけ、全教員の協力を得ながら取り組む。	B	○交流・共同学習の外部機関として、カヌークラブ、三翠園、高知城歴史博物館、土佐和紙作家、NHK高知放送局、高知ファイティングドックス、高知ユナイテッド、せんだんの木、高知県立美術館、東京演劇集団「風」、高知農業高校と実施することができた。 ○SDGs・食育に関しては60%を超える教職員が参画できている一方、依然として30%の教職員は関心が薄い傾向にある。 ○防災教育に関して、継続して取り組み意識向上は図られているが、登下校中の避難経路などを家庭と共有できている教職員は約30%程度と低い。	B	○概ね学校の取組は評価できるので、B評価が妥当と思われる。 ○子どもの命を守るために防災教育を通じて、真摯に取り組んでいる姿勢は評価できる。保護者も学校と連携しながらより一層、協力していきたい。 ○防災教育について、推進リーダーを中心とした担当者だけでなく、教職員一人一人が、自分事として、子どもたちや保護者の安全を考える組織を目指していきたい。

項目		取組のねらい【P】	現状と目標【評価指標】	具体的な取組内容【D】	中間評価【C】	中間評価後の取組内容【P・D】	年度末評価【C】	学校関係者評価	見直しのポイント【A】			
学校設定項目	盲学校の魅力発信	理解啓発・情報発信を行い、社会に開かれた学校としての役割を果たす。また、関係機関からの情報収集を行い幼児児童生徒の確保につなげる。	《成果指標》 【関係機関や外部機関への直接・間接訪問または情報発信（年間20件以上） 【児童生徒が主体となる地域への情報発信（年間3件以上）】	OSNSを活用したホームページでの効果的な発信 ○関係機関（市町村、医師会、進路先、福祉等）への直接訪問の実施（リーフレットの配付や学校概要の説明等） ○地域の学校や外部関係機関への研修会等の案内（新転任者研修、盲学校公開講座等） ○地域の行事等への積極的参加 ○地域や保護者とつながる学校安全に関する取組の実施 ○生徒会の学校安全に関する取組の推進 ○マスコミを活用した戦略的な発信	B	○関係機関との連携、情報収集。（直接訪問7件、電話説明12件、資料送付5件） ○関係機関より依頼を受けて理解啓発活動の企画参加。（キッズ、ボランティア研修会、オンライン視覚障害基礎講座） ○ひまわり教室、サマースクールの実施等、数年ぶりに活動を再開できた。 ○ラジオ番組に教職員が出演し、盲学校の魅力を発信した。 ○地域の学校へ研修会やサマースクールの案内等情報発信することができた。 ○学×地フェスタにブース参加し、生徒が主体となって、理解啓発活動を行った。 ○学校安全について、児童会が積極的に取り組んでいる一方で、生徒会メンバーの関わりは少ない。損得だけの価値観が優先してしまった。	○盲学校の魅力を生徒自身も情報発信できた経験は、卒業後、必ず地域社会で役立つことにつながる。地域住民の健康の保持・増進を担う医療従事者を目指す成人生徒に対しても繰り返し理解を求める。 ○関係機関との連携について、情報発信を特定の部署だけが担当するのではなく、全教職員が引き続き関わるとともに保護者にも協力を得て取り組む。	B	○Instagram（毎日更新の給食メニュー）や報道機関を活用した情報発信に力を注ぎ、テレビ報道3件、ラジオ放送4件、新聞掲載2社（高知新聞・読売新聞）10件など年間を通じて盲学校の活動を発信できた。 ○新規入学者につなげる目的で関係機関や外部機関への直接訪問は今年度、幡多地域を重点的に行った。 ○昨年同様、保護者と連携して、城西中学校の地域防災フェア、人権フェスタに参加し、点字ブロックの啓発活動を行うなど、地域社会とつながりを深めることができた。 ○学校周辺で児童会メンバーによる挨拶運動を行い、理解啓発・通学路の安全教育を実施した。	B	○SNSを活用した情報等、意欲的に盲学校をPRしている姿勢はとても評価できるのでB評価でよいのではないかと。 ○盲学校周辺の点字ブロックが破損しており、地域住民として危険を感じている。学校と協力して関係部署に改善を呼びかけていきたい。	○前述の盲学校の魅力発信については、報道機関の活用とともにSNSを中心とした浸透力も高めていきたい。特に子どもたちや保護者の方にも協力を得て、新規入学者や視覚障害者の理解啓発を推進していきたい。 ○関係機関や外部機関への直接訪問が県内全域に行き届くよう引き続き、粘り強く取り組んでいきたい。
		働き方改革	仕事にやりがいを感じ、「チーム学校」を意識した、風通しのよい職場づくり。	《成果指標》 【働き方に関するアンケートの実施（肯定的評価90%以上）】 【風通しの良い職場環境づくり（年間2回以上の研修会・交流会の実施）】	○学部を超えた支援 ○学習支援員の活用 ○会議開始5分前集合 ○学習形態の工夫（T・T） ○会議の時間設定 ○校務分掌の再編及び業務内容の見直し ○グループウェアのさらなる活用（会議前の事前連絡等） ○行事等の実施方法の工夫 ○メンタルヘルス等研修会の実施 ○ノー残業デイ及び警備開始時間の徹底 ○夏季休業中の一斉閉庁日の設定	B	○月あたりの在校時間が45時間を超えた教職員はいなかった。 ○勤務時間を超過した会議はほぼ皆無であった。 ○夏季休業中に外部講師を招へいし、メンタルヘルス研修会を実施。ストレスマネジメントについて全教職員で学習した。 ○新転任者の中には、盲学校特有の業務内容と捉えられ、引継ぎに苦労している場面も見受けられた。	○各種のマニュアルについても、主任主事、分掌部長が新転任者の視点でわかりやすい表現で記載されているか再度点検する。 ○働きやすさだけでなく、新転任者や若年教員層が、働きがいも実感できるよう視覚障害教育の専門性について、全ての教職員がボトムアップできるよう中堅層の教職員に協力を得ながら取り組む。	B	○働き方に関するアンケートでは、昨年度より改善できたと回答した教職員は約50%と目標値を下回ったが、約80%を超える教職員は定時退勤できており、働きやすさ（量）は達成できている。ただし、一部の教職員は在校時間が毎月45時間に迫る者もあり、依然として業務の平準化に課題が残っている。 ○諸会議については5分前集合、定時終了がほぼできている。 ○メンタルヘル研修会や任意の職員交流行事（フロアバレーボール大会）を実施することができた。 ○学習支援員については、要望の声が大きいと、実現できていない。	B	○学校の取組については、評価できる一方で、業務の平準化に向けて今後とも取り組んでもらいたいので、B評価としたい。 ○働き方改革には人間関係の構築がとても大切と考えるので、多様な年齢で構成される組織ではあるが、今後とも粘り強く取り組んでもらいたい。